

## 編集後記

どうも天候がおかしい。梅雨に入ったといわれるが関東では一向に雨が降らない。アベノミクスの行方もどうも不透明である。金融緩和をすれば、円が下がり、輸出産業が大儲けをしたことだけは確からしい。しかし、だれもが考えるのは成長戦略がどうなるのか、だ。民主党政権で落ちるところまで落ちてしまった経済がそう簡単に立ち直り、たちまち成長を開始すると考える方がおかしい。経済が停滞してきた理由は山ほどあるし、そこには構造的な要因も絡んでいるからだ。

まあそれはそれで専門家にお任せしよう。e-Magazine 第5号がようやく完成したので、公開することにしよう。今回は実にバラエティに富んでいるが、見方によってはいずれも問題鋭く提起しており、現実を見る目には確かなものを感じる。主張に賛否両論があればこそ、是非議論したいと思う。

まずわが研究所代表が日中関係の現状を憂えて、私見を述べている。いったい、日中関係はどこに落ち着くのであろうか。双方ともに感情的になっており、もっと大人になる必要性があるのではないかと思う。そのことはオバマ大統領の態度を見ると、つくづくそう感じる。アメリカは相当中国には不満や不信感があるはずだが、米中会談ではそれをおくびにも出さず、2つの方向(対立か協調か)を見据えたうえで、あくまでも対話と協調の道を選択している。日中関係の打開に何が可能か、会員の皆さんも一緒に考えていただくきっかけになれば、と思う。

論考として、まず明星大学・松林紀行特任教授に自らのドバイでの体験を踏まえて、「ドバイ駐在回想記」を書いていただいた。実に、面白い。松林先生はドバイ滞在中にまさに国家建設に立ち会った経験とそこでの人間関係を踏まえて、うまくまとめてられる。先生曰く、「国を挙げてオフィスビル、マンション、ホテルの建設ラッシュ、石油・ガスパイプライン、発電施設、造水施設、LNG開発など数多くの社会インフラが次々に建設され、まさに日本の戦後直後の高度経済成長期を思わせた。その中で従来からの密貿易、あるいは自由貿易魂の教訓なのか、ドバイのラシッド国王の戦略・機略はひととき異彩を放ち、観光、労働者、税金、起業、アルコール、宗教などあらゆる人と物の規制を外国人に対して取っ払い、イスラムの世界でいち早く自由闊達にして門戸開放した」と指摘し、その画期的手腕は今さらながら驚嘆に値する出来事である、と評価しておられる。先生の文章を読むだけで、ドバイに対するイメージの変化とものすごいエネルギーを感じる。

また沖縄の名桜大学・前学長をしておられた嘉数 啓先生は現在グアム大学で教鞭をとっておられる。その関係上、グアム島の近況報告をかねて、ミクロネシアの概要を伝える文章を書いていただいた。これも読んでいただければわかるように、グアムの現状がよくわかり、大変面白い。嘉数先生のご指摘のように、歴史的にも、また最近では多くの人が観光に訪れることから、日本人にとってなじみの深いところである。嘉数先生が

指摘されているように、ついこの間、日本人が3名殺されたところとしても記憶に新しい。われわれは、このようなグアムにもっと関心を持ち、正確な知識を持つ必要があるようだ。グアム島と言えば、多くの旧日本軍人が玉砕したところとしても知られる。この島の人々の目にはこうした戦争と平和が入り混じって映る日本に対して、いまはどのようなイメージを持っているであろうか。

わが研究所の副代表である上原秀樹・明星大学教授には「インドのマクロ経済の動向と食料・食品産業の位置づけ 中国と比較した視点から」を書いていただいた。「中所得国の罨」の論点を踏まえながら、インドの経済発展およびマクロ経済の動向とその特徴を理解しながら、この国の食料・食品産業のマクロ経済における位置づけを明らかにすることを目的としている。そして BRICs の一員である中国とインドを比較することでこれらの特徴をより深く理解することを試みている。まさに時宜に合ったテーマというべきであろう。同じく、BRICS の問題を扱った、辻教授の「ニュースの裏を読む」を合わせて読んでいただければ、さらに理解が深まるものと確信する。

また、「毛沢東の影」を日吉秀松氏にご執筆頂いた。日吉氏によれば、現在の中国には毛沢東を否定する立場と肯定ないし憧れる立場がある、という。その源泉は1978年の改革・開放にさかのぼる。中国は改革・開放で飛躍的な経済発展を遂げた一方で、抜き差しならないほどの腐敗と不平等を生み出し、それが一部の国民に毛沢東への回帰を呼び起こしている。こうして、現在の中国に分裂と対立の構図を生みだし、その結果様々な形で事件が発生しているという。そこで、日吉氏はなぜ、いま毛沢東に憧れるのかを分析している。我々が、先だつての反日暴動で見た毛沢東の名を書いた、多くのプラカードを思い起こすとき、日本人がぜひ知りたい点だと思ふ、重要な問題意識である。詳しくはぜひ本文を熟読されたい。

最後に、辻 忠博教授には「ニュースの裏を読む(20): まぼろしの BRICs 経済 The Myth of BRICs' Miracle」をご執筆頂いた。辻教授が指摘するように、まず BRICs とひとくくりにする共通点は希薄というべきであろう。辻教授は以下のように指摘している。「ブラジル、ロシア、インド、中国の4カ国をひとまとめにして考えることの是非などについて真剣に議論されることなく(あるいはされたのかもしれないが)、この造語は瞬く間に世界中に浸透して定着し、当事者の4カ国は定期的にサミットまで開催することになった。多くの人々は感嘆を持って BRICs を迎え、世界経済の新たな極としての役割を期待したはずである。にもかかわらず、これらの諸国の景気が減速し始めたことで BRICs ブームは終わったという論調が今や支配的になった。これらの5カ国に問題があったと言うよりも、むしろ BRICs という造語が事実上、無批判的に世界の人々に受け入れられたこと自体が問題であったというべきではないだろうか」と。まさに辻教授が指摘するとおりであり、適切な指摘だというべきであろう(KN)。